

## 自己を見つめる子どもを育てる道徳学習 ～3つの対話活動を通して～

### 要約

近年の高度なグローバル化や情報化により社会は絶えず変化し続け、私たちの生活はより豊かに、より便利になってきた。その一方で、社会モラルの低下や家庭や地域社会での教育機能の低下、社会体験・自然体験の不足などの諸問題が挙げられている。学校でも、いじめ・学級崩壊・少年犯罪・「キレる」子どもなどをよく耳にする。そのような社会の変化に伴い、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を目指す資質・能力を備えることがこれまで以上に必要になっている。アンケートを分析すると、実践意欲は高いにも関わらず、実践化は低いということが分かる。つまり、実践化になかなか繋がっていない、また意欲を持続することができていないということは、道徳の時間の学習で、子どもたちに道徳性を十分に養うことができていないのではないかと考える。そこで、道徳的価値を理解したり、様々な角度から考察して自分なりに考えを深めたりする対話活動を学習過程に位置付けることで、自己を見つめることができると考える。そのために、以下の内容や方法のもと、研究に取り組むことにした。

#### (1) 学習過程の工夫

「つかむ」・「さぐる」・「ふかめる」・「あたためる」の学習過程に3つの対話（登場人物との対話・友達との対話・自分自身との対話）を位置付ける。

#### (2) 発問の工夫

子どもたちが自ら考えたいと思えるような中心発問を設定する。

#### (3) 書く活動の工夫

道徳的価値に迫る子どもの気持ちや考えを吹き出しに書いたり、登場人物の気持ちを〇〇メーターや心情図で表したりできるようにする。

実践の結果、次のような成果（○）と課題（●）を得た。

- 道徳の学習過程の中に、3つの対話「登場人物との対話」「友達との対話」「自分自身との対話」を位置付けたことは、道徳的価値を理解したり、自分の考えを付加・強化・修正したり、自分のこととして価値を捉える上で有効であった。
- 「自分自身との対話」で、日記や振り返りシートを使い自分に「なぜ～したのですか」と問い掛けることは、道徳的価値を自分との関わりで捉え振り返る上で有効であった。
- 道徳的価値を考える際に、共感的な発問だけでなく、分析的・投影的な発問をしたことは、「登場人物はなぜ～したのだろう」「自分だったらどうするのか」と積極的に考えたり、友達と対話したりする子ども達の姿から、道徳的価値について自分との関わりで考え自己を見つめさせる上で有効であった。
- 何を質問すればよいか、どのような質問をすればよいか難しかったという子どもの感想から、質問の仕方を1つではなく多数提示したり、選択肢をつくりそこからびったり合う質問を選ばせたりする工夫が必要である。

**キーワード** 自己を見つめる 3つの対話活動

## 1 主題設定の理由

### (1) 社会的要請・現代社会の動向から

近年の高度なグローバル化や情報化により社会は絶えず変化し続け、私たちの生活はより豊かに、より便利になってきた。その一方で、社会モラルの低下や家庭や地域社会での教育機能の低下、社会体験・自然体験の不足などの諸問題が挙げられている。学校でも、いじめ・学級崩壊・少年犯罪・「キレる」子どもなどをよく耳にする。そのような社会の変化に伴い、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を目指す資質・能力を備えることがこれまで以上に必要になっている。

そして、こうした資質・能力の育成に向け、道徳教育の充実がますます重要になる。そこで、子どもたちが将来直面するであろう様々な状況において事象を深く見つめ、自分はどうすべきか、自分に何ができるかを適切に判断し、実行する手立てを考え、実践できる人間を育てる必要があると考え、本主題を設定した。

### (2) 「学習指導要領解説 特別の教科 道徳」から

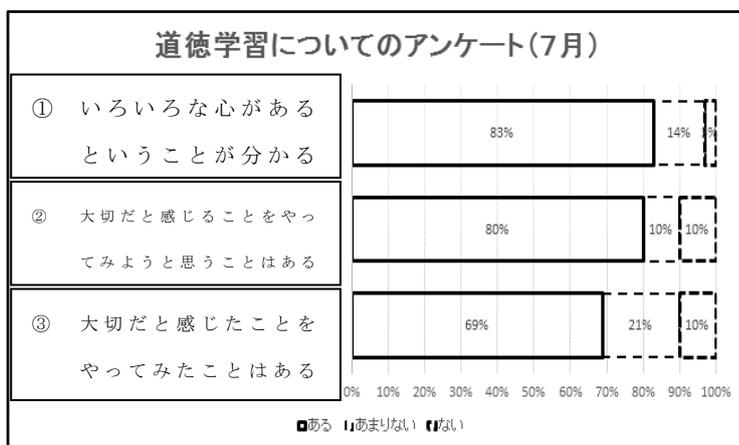
平成 26 年に中教審が出した「道徳に係る教育課程の改善について」の答申を踏まえ「道徳」を「特別の教科である道徳」とし、学習指導要領の一部が改正された。この改正は、発達の段階に応じ、道徳的な課題を一人ひとりの児童が自分自身の問題と捉え、向き合う「考える道徳」、「議論する道徳」へと転換を図るものである。また、道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多角的・多面的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳性を養うことが目標として挙げられている。そこで、道徳的価値を理解したり、様々な角度から考察して自分なりに考えを深めたりする対話活動を学習過程に位置付けることで、自己を見つめることができると考え、本主題を設定した。

### (3) 指導上の反省・子どもの実態から

7月に道徳についてのアンケート調査を行った。(資料1)すると、道徳の学習を通して、「いろいろな心があるということが分かるか」に対して“分かる”と答えた子どもが83%で半数以上の子どもの理解しているということが分かる。次に、「道徳の時間で大切だと感じることをやってみようと思うことはあるか」に対して“ある”と答えた子どもが80%と意欲は見られる。

しかし、「道徳の時間で、大切だと感じたことをやってみたことはあるか」に

対しては、“ある”と答えた子どもが69%と低い。このことから、実践意欲は高いにも関わらず、実践化は低いということが分かる。実践化になかなか繋がっていない、また意欲を持続することができていないということは、つまり、道徳の時間の学習で、子どもに道徳性を十分に養うことができていないのではないかと考える。



【資料1 道徳学習についての事前アンケート】

このような結果になった背景には、私の指導上の課題が2つあると考えられる。

1つは、授業を構想する際に、授業のねらいとそこで取り扱う道徳的価値に対して明確な考えをもつことができていないこと。アンケート結果では、半数以上の子どもが理解できていると答えているが、道徳のノートを見ると、教師がねらいとしている価値を十分に理解しているとは言えないものが多い。2つは、道徳の時間の学習で、資料に出てくる中心人物の心情を追うことだけで終わり、自分を振り返ることがなかなかできないこと。そのため、道徳的価値を自分との関わりで捉えることが十分にできていなかったと考える。そこで、道徳的価値を理解したり、様々な角度から考察して自分なりに考えを深めたりする対話活動を学習過程に位置付けることで、自己を見つめることができると考え、本主題を設定した。

## 2 主題の意味

(1) 主題「自己を見つめる子どもを育てる道徳学習」とは

ア 「自己を見つめる」とは、日頃何気なく体験している道徳的価値を自分との関わりで捉え、自分のこととして考えたり振り返ったりすることである。また、自分のこととして考えたことや感じ方を他者と交流することで「自分にとって大切な」「今までの自分にはなかった考えだ」と感じ、これまでの自分のよさや不十分さに気付くことで改めて自分自身のことを考えることである。このように、自らに問いかけることを繰り返すことで、よりよく生きていくためには、自分はどうすればいいのか、どうしていきたいのかと積極的に自己像を描いたり、実践していこうとする思いや願いをもったりすることができると思う。

イ 「自己を見つめる道徳学習指導」とは次の一連の三つの姿で捉えている。

- ・ 道徳的価値の大切さ、実現の難しさ、考えや感じ方の多様さについて理解すること（価値についての理解）
  - ・ 資料を通して、ねらいとする道徳的価値について自分の考えを持ち、他者の考えにふれることで、付加・修正・強化された考えをもとに自分との関わりで価値を捉えること（自分との関わりで価値を捉える）
  - ・ 道徳的価値に対する自分の考えについて、再度心に留め、よりよい自分に向けてしていこうとする思いや願いをもつこと（実践意欲の喚起）
- これらの条件を満たすことで、自己を見つめることができると考える。

(2) 副主題「3つの対話活動を通して」とは

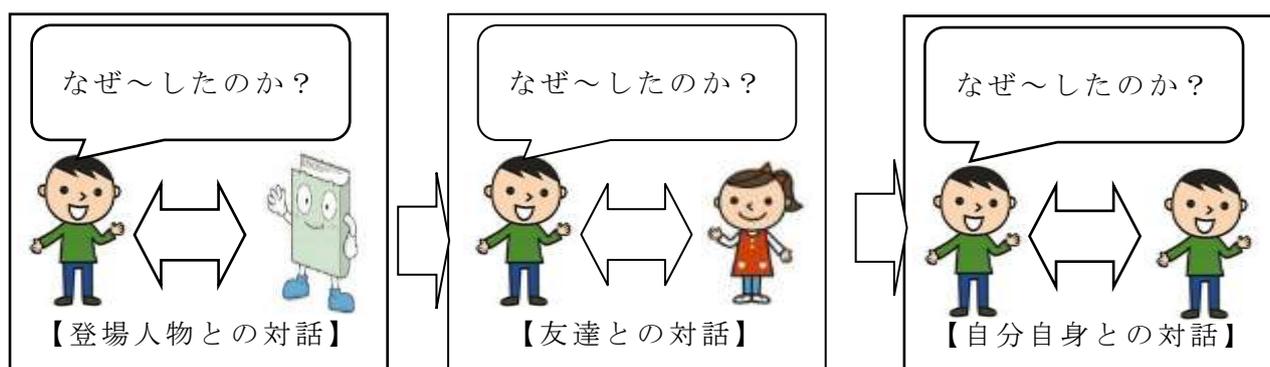
「対話」とは、一般的には、話し手と聞き手が言語を介して理解を深めながら、自己の見方・考え方等を拡充するコミュニケーションの在り方である。本研究では、「対話」を「お互いが“聴くこと”“答えること”“問うこと”を繰り返し行う話合い」と定義する。

「3つの対話」とは、「登場人物との対話」「友達との対話」「自分自身との対話」のことを指す。

「3つの対話活動」とは、3つの対話を、「つかむ」・「さぐる」・「深める」・「あたためる」の学習過程の中に位置付けて、道徳的価値をより自分との関わりで捉えることができるようにすることである。

登場人物との対話	資料の登場人物が決断、選択した生き方や考え方に対して、「なぜ～したのか」という問いを自らつくり、自分が登場人物になりきってその行動や考えについての理由を答える活動。
友達との対話	登場人物との対話でつくった自分の考えを友達に話す活動。ここで、自分の考えと友達の考えを比較し、共感したり違いを認識したりする。また、友達の考えに対して「なぜ～したのか」と尋ねることで、お互いに考えを深め合うことができる。
自分自身との対話	自分自身のことを振り返り、自分が選択した生き方や考え方に対して、改めて「なぜ～したのか」と自らの心に問い掛け自己を見つめる活動。

**【資料2 対話活動の種類とその特徴】**



**【資料3 3つの対話活動】**

**3 研究の目標**

道徳の時間の学習過程の中に3つの対話活動を位置付けることで、自己を見つめる子どもを育てることができるか、究明していく。

**4 研究の仮説**

道徳の時間の学習において、3つの対話活動を学習過程に位置付けることで、道徳的価値をより自分との関わりで捉え、自己を見つめる子どもが育つであろう。

**5 研究の構想図**



## 6 仮説検証の内容と方法

本仮説に取り組むための具体的な方途として、以下の内容や方法を決め、研究に取り組むことにした。

### (1) 学習過程の工夫【視点①】

段階	内容
つかむ	資料を読み、課題を見つけてねらいとする道徳的価値への方向付けをする。
さぐる	主人公の気持ちや行為について話し合い、ねらいとする道徳的価値の追求をする。(登場人物との対話)(友達との対話)
ふかめる	主人公の気持ちや行為について、行為の背景にある気持ちを自分との関わりで捉え、道徳的価値について考える。(自分自身との対話)
あたためる	「今までの自分」を振り返るとともに、道徳の時間に学んだことを観点として、「これからの自分」について考えることで、行動化への展望をもたせる。(自分自身との対話)

### (2) 発問の工夫【視点②】

発問には、子どもの心を動かし、多様な考えを引き出し、思考を深める働きがある。道徳的価値を自分との関わりで捉えるためには、発問が重要だと考える。そこで、子どもたちが自ら考えたいと思えるような中心発問を設定する。この中心発問は以下の4種類に分けられる。

「共感的」な発問	～はどんな気持ちや考えだろう。(〇〇は今、どんな気持ちだろう)
「分析的」な発問	～は何だろう・～はなぜだろう。(〇〇がそうしたのはなぜだろう)
「投影的」な発問	～ならどうする(考える)か。(～の時、自分だったらどうするか)
「批判的」な発問	～についてどう考えるか。(〇〇がしたことをどう思うか。)

### (3) 書く活動の工夫【視点③】

書く活動を取り入れることで、子どもが自分と向き合い、自分の考えを明らかにしたり、確かなものにしたりすることができる。そこで、道徳的価値に迫る子どもの気持ちや考えを吹き出しに書いたり、登場人物の気持ちを〇〇メーターや心情図で表したりできるようにする。

## 7 研究の実際

### (1) 検証1(10月実施) 第2学年 主題名「あきらめないで」

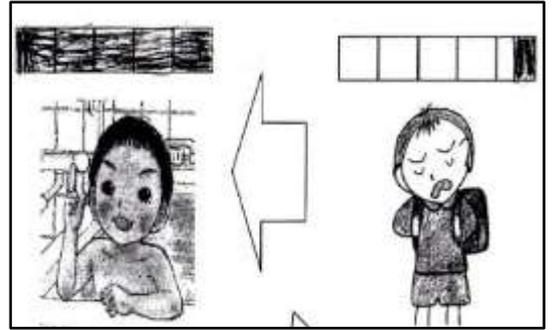
価値項目 A—(5) 自分のやるべき勉強や仕事をしっかりと行うこと

資料名「かけ算けんてい」(出典:文溪堂)

ねらい: けんとかかけ算九九を諦めずに練習する様子を通して、自分がやるべき勉強や仕事をやり遂げるためには、諦めなくなる弱い心を乗り越えることが大切であることを理解させ、自分がやるべき勉強や仕事は諦めずにやり遂げようとする心情を育てる。

### 《登場人物との対話》

九九はできなくてもいいと諦めた時の気持ちと再び頑張ろうと決めた時の気持ちを“やる気メーター”（資料4）に表し、けんとの気持ちが大きく変化したことを捉えた。そして、一度は諦めた九九を再び頑張ろうと思った理由を、子ども自らがけんとに「なぜがんばろうと思ったのですか」と質問することで、「お兄ちゃんが励ましてくれたからやっぱり頑張ろうと思ったから」「2年生のうちに覚えておかないと3年生になったら困るから」「覚えなといけないから」など自分の考えをつくっていった。



【資料4：やる気メーター】

### 考察1

けんとの気持ちを“やる気メーター”に表し、変化したことを視覚的に比較することで、「なぜ、頑張ろうと思ったのか」と発問を焦点化することができた。また、けんとに質問することで、けんとに自分を投影させて、その時の気持ちや理由を考え、道徳的価値を追求することができたと考える。（資料4）

### 《友達との対話》

まずは、自分の考えをもとに、友達との対話をペアで行った。片方が質問者でもう一方は、けんとになりきって答えた。（写真1）最初の質問は、「なぜ、頑張ろうと思ったのですか」とし、答えた後に、答えたことに対して質問を再びすることをお互いに行った。お互いに登場人物との対話で作った自分の考えを出し合うことで、同じ考えや違う考えに気付くことができていた。また、2度質問することで、より道徳的価値に迫り、お互いに考えを深めることができた。

C1：けんくん、なぜ頑張ろうと思ったのですか？

C2：お兄ちゃんに頑張れと励まされたからだよ。

C1：なぜ、励まされたら頑張ろうと思ったの？

C2：誰かが応援してくれると、勇気がでるからだよ。

C1：わたしは、少し違うよ。

C2：けんくん、なぜ頑張ろうと思ったのですか？

C1：だって、2年生のうちにかけ算を覚えないと3年生になって困ると思ったからだよ。

C2：なぜ、困るからしようと思ったの。

C1：だって、今やらなければいけないし、やらないと分からなくなるからだよ。



【写真1：友達との対話の様子】

### 考察2

登場人物との対話でつくった自分の考えをもとに、お兄さんの一言を聞いて変容したけんとの気持ちをお互いに質問し合って対話することは、共感したり違いを認識したりしながら、考えを深め合う上で有効であった。対話でお互いにけんとの気持ちや

行動に対して何故を問い答えることで、けんとの気持ちを深く考え、道徳的価値を理解することができたと考える。

《自分自身との対話》

事前に書かせておいた日記を使い、自分自身のことを振り返った。自分が諦めずにできたことや、惜しくも諦めてしまったことを読み返し本時で学習した道徳的価値と照らし合わせて考えた。自分自身を振り返る際に、自分へ「なぜわたしは～ができるようになったんですか？」「なぜわたしは～を諦めたのですか」と質問をした。また、これからどうしていきたいかを考えた。



【写真2：自分自身との対話】

考察3

教材の価値に沿った内容の日記を活用したことで、日頃の何気ない自分自身の気持ちや行動を振り返り、自分のやるべきことは諦めずにやろうとする心を見つめ、道徳的価値をあたためることができた。(写真2)しかし、自分自身へどのように質問したらいいのかが分からない子もいた。そこで、質問の型の例を提示するなどの工夫が必要だったと考える。

(1) 検証2 (11月実施) 第2学年 主題名「素直な心で」

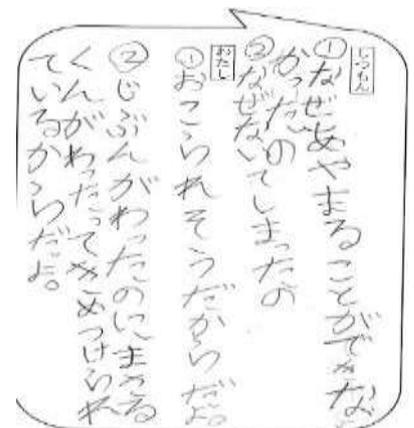
価値項目 A- (2) うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活すること

資料名「花びんがわれた」(出典：日本文教出版)

ねらい：わたしが正直に言えなかった後の行為を考える活動を通して、自分の非は素直に認め、ごまかさずにきちんと謝ることで心が晴れ晴れするということを理解させ、うそをついたりごまかしたりしないで素直に伸び伸びと生活しようとする態度を育てる。

《登場人物との対話》

花びんを割ってすぐに謝ることができた「まもる」と、できなかった「わたし」の挿絵を対照的に板書し、まもるのように謝らないといけないと分かっているけどできない心の葛藤を捉えた。そして、何故謝ることができなかったのかを、子どもが自らわたしに質問することで、「先生やみんなに怒られるのが嫌だから」「謝るのが恥ずかしいから」「本当のことを言ったらみんなに嫌われてしまうかもしれないから」など自分の経験と重ねて自分の考えをつくっていった。また、より「わたし」と自分自身を重ねて考えることができるように「あなたがわたしだったらどうしますか」ということについても考えた。



【資料5 子どものワークシート】

### 考察 1

「なぜ謝ることができなかつたのか」と発問を焦点化し、そのまま子ども達が質問をすることは、今何を考えればよいかを明確にしたり、登場人物になりきって答えたりする上で有効であったと考える。また、資料が子どもの実生活に近いものだったため、資料の「わたし」をかりて気持ちを考えたり、発問にない質問を自ら考えて問うている子どもも見られたりして、道徳的価値を追求することができたと考える。さらに、発問にない質問を自ら考えてしている子どもも見られた。(資料 5)

### 《友達との対話》

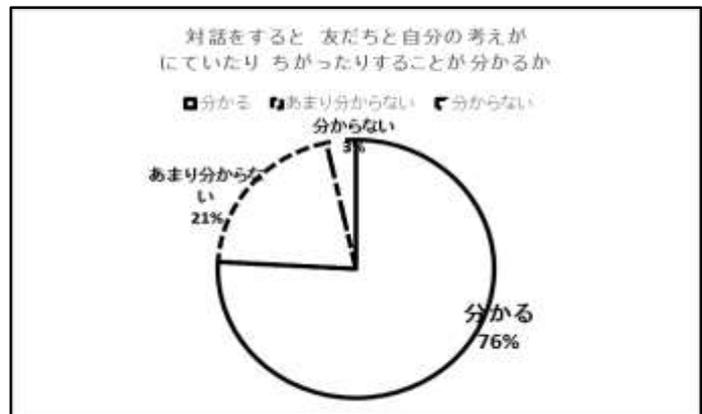
まずは、検証 1 と同様にペアで対話を行った。その際により登場人物になりきれるように (写真 3) のようにお面を使った。友達との対話で同じ考えや違う考えに気付き、それをワークシートに付加していた。また、自分だったらどうするかについての対話も行った。登場人物との対話で、謝らないといけなけれどなかなかできない理由を考えたため、「すぐに謝る」「時間がたってから謝る」「ずっとだまっておく」の 3 つの考えがでてきた。



【写真 3 : お面を使った対話】

### 考察 2

検証 1 と同様に、登場人物との対話でつくった自分の考えをもとに、友達と対話することは、多様な考えを知り深め合う上で有効であったと考える。登場人物に同化させるための手段としてお面を使用した。お面が気になる子どもも見られた。そのためお面の使用は子どもの実態に合わせる必要があった。



【資料 6 : 対話についてのアンケート(検証授業後)】

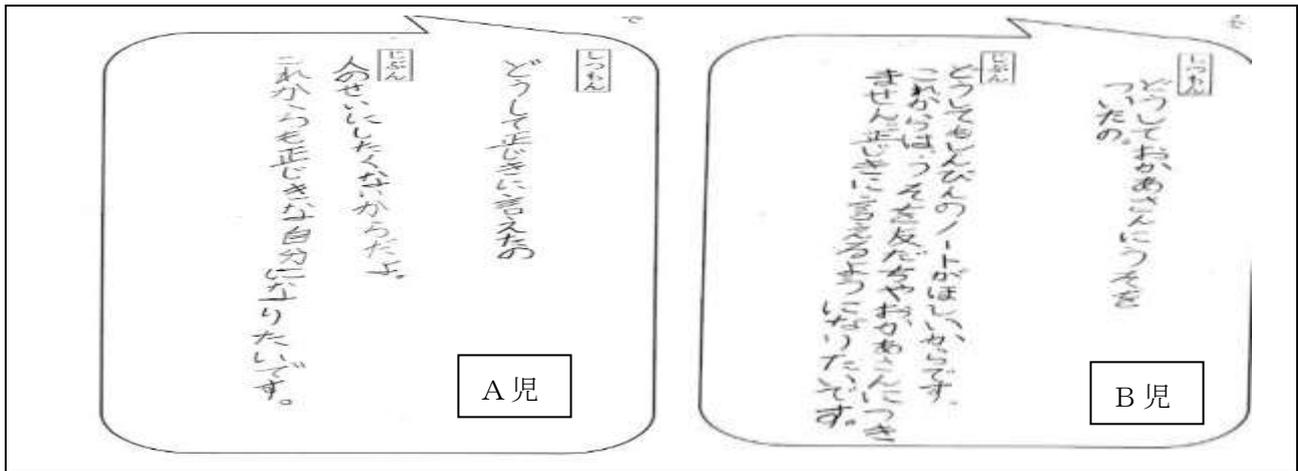
その後の行動をクラス全体で対話することは、多様な考えを知ることができたため有効であったと考える。(資料 6)「すぐに謝る」という行動が大半であったが、「ずっとだまっておく」という人間の弱みに共感する姿も見られた。対話をしなかったら自分だけの考えにおさまっていたが、対話をすることで多様な考えを知ることができ、付加・強化し、道徳的価値を理解することができたと考える。

### 《自分自身との対話》

事前にかかせておいた振り返りシートを使い、検証 1 と同様に自分自身のことを振り返ったり、これららどうしていきたいかを考えたりした。また、最後に自分の振り返りを発表するまで行い、本時で学習した道徳的価値についてあためていった。

### 考察 3

自分自身への質問の型を提示することで、全員が自分のした行動について自分自身に質問をすることができた。また、自分自身のことを改めて振り返ることで、うそをついたりごまかしたりしないで素直に伸び伸びと生活しようとする心を見つめることができたと考えられる。



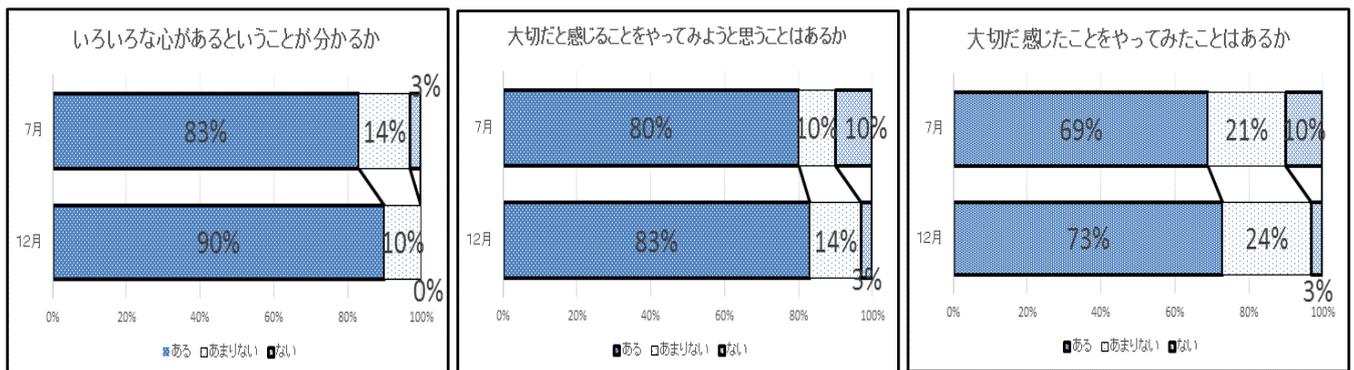
【資料7：子どものワークシート】

しかし、子どもたちが考える“ごまかし”や“嘘”の基準がバラバラであったため、道徳的価値に沿った振り返りができていない子どもも見られた。事前を書くのではなく、道徳の授業の中で振り返りをする時間の確保が必要であったと考える。また、今回は自分の弱い部分を振り返ることが多かったため、それを全体に発表するとなると、書いてはいるものの言うことにためらう児童が多かった。道徳的価値のあたため方の支援が必要であったと考える。

## 8 研究のまとめと今後の課題

### (1) 研究のまとめ

事前アンケートと同じアンケートをとると、(資料8)の結果が出た。「いろいろな心があるということが分かるか(価値理解)」に関して“分かる”と答えた子どもは、83%から90%に増えた。さらに、“ない”と答えた子どもが7月には3%残っていたが、12月には0%になったことが分かる。また、「大切だと感じることをやってみようと思うことはあるか(価値の実践意欲)」に関して“ある”と答えた子どもが80%から83%に増え、“ない”と答えた子どもが10%から3%まで減ったことが分かる。「大切だと感じたことをやってみたことはあるか(価値の実践化)」に関して“ある”と答えた子どもが69%から73%に増え、“ない”と答えた子どもが10%から3%にまで減ったことが分かる。このことから、3つの対話活動を仕組んだことで、道徳的価値を理解し、自分との関わりで価値を捉えることができた子どもが増えた。(資料9)そのため、実践化にもつながったと考える。



【資料8：道徳学習についてのアンケート】

しつもんをしてわたしは自分の心の中がよく分かりました。しつもんをしていない年生の時よりよくい分か思っていることが分かりやすかったです。

自分にふりかえりをして、自分が何をでんきょうしたかわかりやすかったです。

#### 【資料 9 : 対話についての感想】

(2) 研究の成果と課題 (成果 : ○ 課題 : ●)

- 道徳の学習過程の中に、3つの対話「登場人物との対話」「友達との対話」「自分自身との対話」を位置付けたことは、道徳的価値を理解したり、自分の考えに付加・強化・修正したり、自分のこととして価値を捉える上で有効であった。(視点1)
- 「自分自身との対話」で、日記や振り返りシートを使いその時の自分に「なぜ～したのですか」と問い掛けることは、道徳的価値を自分との関わりで捉え振り返る上で有効であった。(視点1)
- 道徳的価値を考える際に、共感的な発問だけでなく、分析的・投影的な発問をしたことは、「登場人物はなぜ～したのだろう」「自分だったらどうするのか」と積極的に考えたり、友達と対話したりする子どもの姿から、道徳的価値について自分との関わりで考え自己を見つめさせる上で有効であった。(視点2)
- 道徳の時間に書く活動を取り入れたことは、自分の考えをつくる時や、考えることを焦点化させたりする上で有効であった。また、自分の考えを文字で表すことで友達と対話する時に、自信をもって自分の考えを表現することができていた子どもの姿からも有効であったと考える。(視点3)
- 何を質問すればよいか、どのような質問をすればよいかが難しかったという子どもの感想から、質問の仕方を1つではなく多数提示したり、選択肢をつくりそこからぴったり合う質問を選ばせたりする工夫が必要である。(視点1)
- 今回の検証では「主として自分自身に関すること」で行ったため、他の視点でも有効かどうか検証が必要である。

〈参考文献〉

- ・ 文部科学省 平成20年 小学校指導要領解説道徳編 東洋館出版社
- ・ 初等教育資料 平成27年 「特別の教科 道徳」の実施に向けて 東洋館出版社
- ・ 金井 肇 平成 8年 道徳授業の基本構造理論 明治図書
- ・ 渡邊 満他 平成28年 小学校における「特別の教科 道徳」の実践 北大路書房